

# 揖保川水系の前半期古墳について

是 川 長

## はじめに

古墳の研究は大和政権の成立、発展と重大なかかわりがある。ここ十数年前から全国各地で弥生時代末期から古墳時代初頭にかけての「古墳」に先だつ墓制の実態の事例が数多く呈示されてきた。方形台状墓（周溝墓）、土壙墓、箱式石棺、配石墓等がそれである。それらの発掘調査資料が増加した割に、「古墳発生」に直結するかたちで説明が十分にされているとはいえない現状である。むろん、古墳発生にせまる研究視角の一面には、弥生時代末期の集団墓から「古墳発生」をせまる方法は必要な方法であるが、「古墳」が階級支配者としての権力の象徴として古墳造営されねばならなかった必然性を追求していく視角もまた必要なことであろう。その間、「古墳発生」にかかわる問題解明のすぐれた論攻も多くあるが、まだまだ未解決の問題が多い。こうした極面を打解するためにも、古墳発生にかかる研究も地域史からせまっていくことの大事さを再確認しなければならないとおもう。こうした意味において揖保川水系をとりあげてみたい。また、具体的には加古川市西条52号墳、揖保郡揖保川町養久山墳墓群の発掘調査に関係してきた一員として、「古墳」の発生という問題にかかわっていきたい。なお、揖保郡揖保川町金剛山6号墳については発生期古墳の論議の中で一部とりあげられることがあるが、正式な資料紹介がされていないので、ここに未発掘調査資料であるが、その概要を呈示し、あわせて発生期古墳の2～3の古墳を列举して後考に資することにした。したがってこの一篇は論述というよりも研究ノートである。

### 1. 特異な墳形をした前方後円(方)墳

揖保川水系の前方後円墳は現在24基確認されていて播磨地方の水系中最多数を占める。また、県下の水系のうち、古式古墳の集中している地域としてもよ

く知られていることである。古式古墳とみられる古墳のうち前方部半ばより前端に向けて極端に開く前方後円（方）墳があり、箸墓古墳再検討以来よく問題にされるものである。

#### 金剛山 6 号墳（揖保郡揖保川町金剛山）

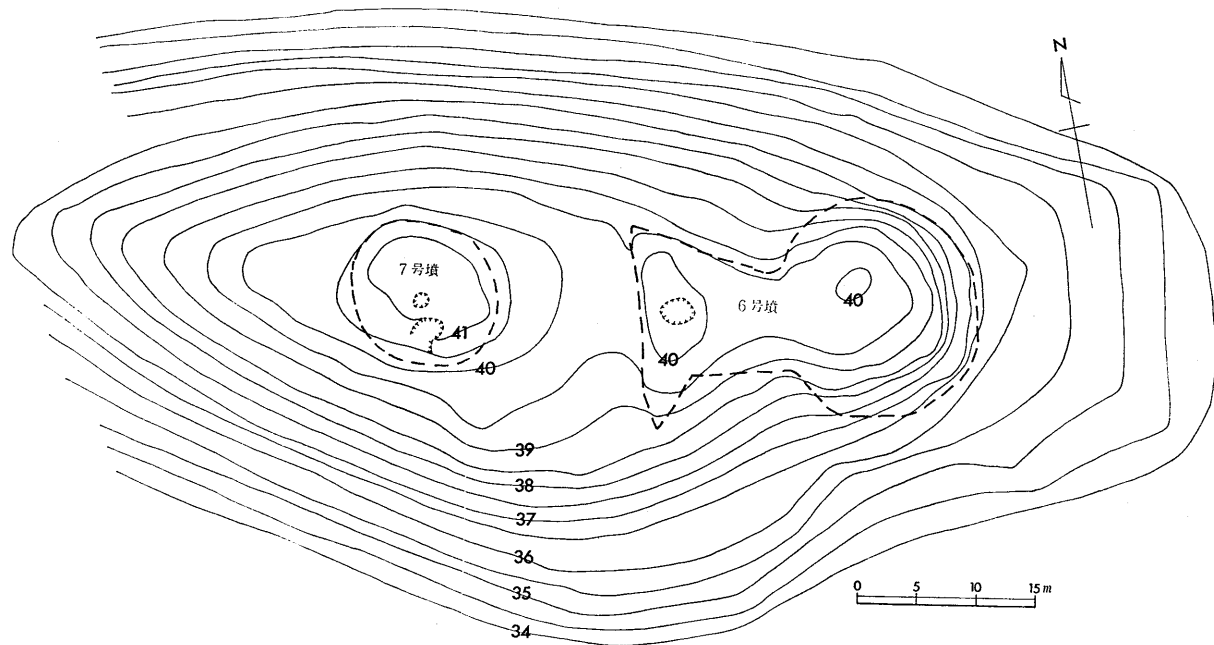
揖保川の下流域の左岸の入りこんだ舌状にのびた比高30m丘陵上にあり、かつては揖保川が蛇行して山裾近くまで流れていたとみられ、小盆地のような完結した小平野を呈している。全長28m、後円部径18m、後円部高さ 3.5m、前方部幅18m、前方部高さ 0.5mの前方部半ばより前端に向って極端に開く形をしている。大和の箸墓古墳、当地の養久山 1 号墳の墳形をより極端にしたものである。後円部は全面葺石で覆われており、一見、石垣を見る感じがする。その葺石は後円部の後の 墳丘基盤から 高さ 1.3mのところ段がつけられていて、さらに墳頂にむかって葺石が続く二段築成の古墳である。なお、この葺石は後円部の前方部側にはない。後円部墳頂に天井石とみられるものが一部露出していて、内部主体は竪穴式石室であることに相違ない。前方部には葺石はなく25×30cm程度の石を並べた列石で墳域を区劃している。前方部前面の列石に接して幅約60cm弱の平らな石が石段状にある。なお、後円部の盛土内から時期判定を積極的にできない小片の土器片多数が出土している。

6 号墳より西方に約11m離れて円墳の 7 号墳がある。この 7 号墳は径13m、高さ 1 mで全面葺石で、一見、積石塚のようである。墳丘中央に庄内式平行のツボ棺が埋葬されていたことが盗掘によって知られている。

#### 養久山 1 号墳（揖保郡揖保川町養久）

金剛山 6 号墳より約 3.4km北方の揖保川左岸のカギ形にまがる山塊が続いている。この養久山には立地・分布からみて5つのグループに分れて計38基の墳墓が存在する。また、この養久山に連続する山頂に三ツ塚古墳がある。養久山 1 号墳は昭和42年から43年にかけて発掘調査が実施されたが、その発掘調査報告書が発刊されていない。筆者もその発掘調査の一員として参加したものであるが、詳しくは報告書に待たねばならないが、まずはその概要を記しておく。

揖保郡揖保川町金剛山6・7号墳実測図



等高線の数値は海拔を示す  
点線は墳丘裾部推定線

養久山1号墳は墳墓群の南端部にあたる尾根状にのびる丘陵突端にあり、自然地形に左右されて作られている前方後円墳である。全長30m、後円部径17m、後円部高さ2.2m、前方部幅8m、前方部高さ0.7m、前方部半ばの最少幅3.3mで、後円部の墳丘斜面は二段の葺石（はり石）で築成されており、前方部には葺石はなく墳丘裾部に列石が配してある。葺石は5世紀代の古墳にみられる葺石の状態とは異なり、岡山県都月2号墳にみられるような石垣状のもので、封土の流失を防ぐというよりも、あくまで墳域の区劃を示すものであったとみられる。また、前方部半ばより前端に向って開くもので、後円部中段の葺石、列石の状況から判断して後円部（円墳）築造後、前方部が付け加えられたことは明らかである。

#### （第1主体）

後円部中央にある竪穴式石室で長さ約4m、幅1.1m、高さ0.9mで花崗岩の割石で作られており、天井石は一枚板の石ではなく、石英粗面岩の比較的小さなものを持ち寄せながら蓋をしている。いわば側石と天井を区別しないような構築である。棺は割竹形木棺であったとみられ、副葬品は小形の四獣鏡1面、鉄槍1本がある。

#### （第2主体）

第1主体に接した南側で、板石を使用した小児用の箱式石棺で蓋石を二重にして丁寧に作られている。鹿角付鉄槍1本が出土している。なお、天井石の上に小砂利、角礫等で覆われていて、小砂利の中からタタキ目のある弥生4様式（上東式）とみられる土器片10数個が出土している。

#### （第3主体）

第2主体の南側で、長さ1.8mの箱式石棺で、40才前後とみられる成人男子の人骨があり、副葬品にガラス玉8個、絹布でまいたとみられる鉄剣1本があって、棺外に鉄斧（弥生的なもの）が発見されている。

#### （第4主体）

第1主体の西側で、小児用の箱式石棺であり副葬品はない。

#### （第5主体）

第1主体の北側で、長さ1.3mの箱式石棺で蓋石を何重にも重ねたもので、材質は石英粗面岩を使用している。頭から足に向って石棺の床面が傾斜している。若年のものとみられる性別不明の人骨が発見されている。なお、棺内に朱の散布が認められている。

#### (第6主体)

長さ1.7m程度の箱式石棺で中に人骨が発見されたが、人骨の乱れから埋葬後に何らかの理由で石棺が開けられたとみられる。

以上のように前方部には埋葬主体はなく、後円部に6個の埋葬主体があり、被葬者の構成は成人4人、小人2人である。とくに第1主体の堅穴式石室には割竹形木棺があり、発生期古墳の特徴をもっている。

#### 権現山51号墳（揖保郡御津町中島）

揖保川河口近くの標高140mの山頂に立地し、瀬戸内海を臨むことのできる景勝の地である。この山塊一帯には前方後円墳、前方後方墳、円墳、方墳を含くめ162基の古墳がある。なかでも51号墳は最高頂にあり、全長50mの前方後方墳である。後方部一辺約23m、高さ2.3m、前方部長さ27m、前方部幅19.3m、前方部高さ1.5m、くびれ部幅9.5mで、前方部の前方へ $\frac{2}{3}$ あたりから前端に向けて一直線に極端に開くもので、前方部の様相は金剛山6号墳と酷似する。したがって、一見、前方部が別個の墳丘であるとみられるぐらいであるが、後方部より続く下段の列石からそうでないことが判明する。なお、前方部に向って左側の前方部半ばに自然石を積んだ石段のようなものがあるが、古墳築造当時のものかどうか明らかなでない。なお、この古墳から特殊ハニワ片が出土している。

#### 2. 発生期古墳について

古墳は首長の霊力継承の儀式的場 何をもって「古墳」とするかは大変な難問である。本来、古墳の歴史的意義は「農業共同体の首長」として地域的統一をなしえた支配者が大和政権との間でなんらかの政治的関係（隸属関係）が成立したことにある。3世紀末から4世紀初頭の古墳の出現する時期の古墳に

あらわれた諸現象の中で、どのような考古学資料でもって政治的関係を立証するかは極めてむずかしい問題であるが、弥生時代末期の共同墓地から、階級関係のうえにたって共同体首長として権力を確立した首長墓を「古墳」とみるといえよう。しかし、具体的にどのような古墳をもって、それと証明し断定するかは意見の多く分れるところである。最近、弥生時代の集団墓のうち方形台状墓（周溝墓）を古墳への連続とみる研究がすすめられている。これは弥生時代の集団墓の中から特定の個人が、一般と異なって大きな墳墓を独自につくっていった状況を追求し、そうした特定の墳墓が古墳発生へ連続するとの仮説にたったものである。

一方、「古墳」は弥生時代の卓越した墳墓と部分的要素の共通性、連続性だけでは説明しきれない次元の異なる性格をもっている側面がある。

古墳の発生は「神性を付与された首長の霊を共同体の守護霊としてまつる集団的な送葬儀礼」として発達してきたとみるならば、発生期の古墳は首長墓として共同体成員に対し権威の誇示、象徴として造営されたという一面があることはもちろんであるが、実は「古墳」は次代の首長が首長として絶対的な霊力を継承する場（儀式）、すなわち首長の死が確認され新しい首長が誕生するための不可欠の儀式の場であったとみられている。

**金剛山6号墳・養久山1号墳の検討** 発生期古墳の特徴として共通することは、立地が自然地形に左右されているというよりはよく利用していること、墳形が前方後円（方）形であり、内部主体が竪穴式石室（割竹形木棺）で、副葬品には鏡、玉類、武器、工具類のセット等が指摘される。

養久山1号墳、金剛山6号墳、権現山51号墳、またこの地方の古式古墳としてよく知られている吉島古墳にしても丘陵、尾根等を利用してつくられているとみられ、尾根下方部に後円（方）部がつくられ、したがって、尾根上方に前方部が位置している。そこで前方後円（方）墳の起源について墳丘築造の土木工事上、切り盛をする土量を最少限にとどめ効果的に墳丘を盛り上げた結果だとする丘尾切断説がある。

前方部の半ばより前端に向けて開いている古墳（大和箸墓古墳、備前車塚古

墳、山城大塚山古墳、養久山1号墳等）に着目して、前方後円墳の成立、つまり最古形式の古墳は前方部・連絡部（通路）・後円部から構成されていて、集団の唯一最高の神人的支配者として、円丘または方丘に埋葬された首長墓（後円部）に対し、かつての共同体祭祀の場が象徴として、つまり方形墓が形象として付設されたとみる考えもされている。要するに前方後円墳の成立は前方部の性格をどう考えるかにかかる問題であろう。ここで、養久山1号墳は後円部が築造された後に付加されていることに注目したい。古墳中期の前方後円墳においても墳丘の築造工程上、まず後円部を築成したあとに前方部が築成されていることが指摘されているが、発生期古墳と考えられる古墳の前方部の付加と古墳中期の前方部の築成とはやや異なると考えたい。発生期古墳のひとつであると思われる大和箸墓古墳も後円部築造後、前方部が築成されたといわれているし、発掘調査はされていないが金剛山6号墳も墳丘築造前の地形と墳丘のあり方からして、後に前方部が付加されたとみられる。

いずれにしろ、前方部の半ばから極端に開く前方後円墳がひとつの形式としてとらえることが可能である。これらの形式の古墳がいつ頃の築造であるかは重大な問題である。立地、墳形から古式古墳であることが想像できるのであるが、完掘された例は多くないので確実に編年づけることにまだ資料不足があることはいなめない点がある。でも養久山1号墳の発掘調査から類推すれば、堅穴式石室（割竹形木棺）をもちながら中心的な主体部の周りに、その被葬者の親族とみられる被葬者の構成がうかがえることは養久山墳墓群（38基で5つのグループで構成される）に示される「集団」から成長した共同体首長の姿をみることができる。また、副葬品全体をみても吉島古墳にみられる鏡、玉類、武器のセットがととのっておらず、むしろ鏡は漢式鏡（三角縁神獸鏡等）でなく、みかたによればそれ以前の魏の鏡とみられるものであり、鉄器も槍などの武器で弥生的なものとみられるものである。

養久山1号墳は前方部と後円部の高さの差が1mあり、権現山51号墳にあっては0.8mの差があるが、金剛山6号墳では前方部と後円部の差がほとんどないことは古墳築造すなわち前方後円（方）墳の発生を考えるに極めて示唆的で

ある。前方後円墳のプランとしては、いわゆる前方部半ばより前端に向けて開く三者の中で、その度合は(1)金剛山6号墳、(2)権現山51号墳、(3)養久山1号墳の順である。また、前方部と後円部の高さの差が小さいものその順である。前方部の開き具合と前方部の高さに何か相関関係を想像することができる。ひいては前方部の機能を考える時、そこに重要な問題があると考えられる。形式的に最古の墳形プランと想定できる金剛山6号墳の前に7号墳があることは前方後円(方)墳の発生時期を考える重要資料といえる。

**養久山・三ツ塚古墳群の形成** まず養久山1号墳の時期をどう考えるかである。いづれ報告書で詳しく説明されるとおもうが、私見を申し述べておきたい。養久山墳墓群(38基)の中で5基が発掘調査されたのみで、墳墓群全体の時期、性格づけをするには資料不足の感がする。養久山墳墓群は地形、分布からみて前方後円(方)墳、双方中方墳、円形封土(ツボ棺、箱式石棺、配石墓、土壙墓)が5～10基を単位として5つのグループで構成されている。これら弥生後期のひとつのグループは世帯共同体を示していると理解される。ここでは5個の世帯共同体が山麓前面にひろがる水田の灌漑用水を共通にする農業生産を行っていたとみられる。したがって、養久山墳墓群は数個の世帯共同体を集合するひとつの農業共同体的結合を結んでいたものを示している。養久山1号墳は同じ養久山山塊の尾根上に位置しているとはいえ、5個のグループからやや離れて立地し、前方後円形を呈していることなどから、1号墳の被葬者たちは5個の世帯共同体群の頂点にたつ農業共同体首長家族とみられ、堅穴式石室はその家長すなわち「首長」であったと考えられる。

むろん、掛保川水系の弥生後期末から古墳時代初頭における墓制に周溝墓、箱式石棺、配石墓、土壙墓、堅穴式石室墓等の各種があることはよく知られているところである。いわゆる壮大な「首長墓」がつくられるようになって、いろいろな墓制でもって弥生時代の墓制である「集団墓」が存続していたことは事実である。ただ養久山1号墳の内部主体が後円部の中心にある堅穴式石室＝「首長」だけの埋葬以外に、その周囲にその家族成員とみられるものの埋葬があることは、吉島古墳にみられるような一墳一首長の典型的な「古墳」の



段階にまでたち至っていなかったことを示しているとみられる。前記の如く 1 号墳の副葬品が弥生的であることなどは「集団墓」と「農業共同体の首長墓」の中間にあることを示しているといえよう。だからといって、養久山 1 号墳の様相はひとつの形式であって、その築造が 4 世紀初頭の吉島古墳よりさかのぼるものと必ずしもいえない。

吉島古墳については位置、立地、墳形、副葬品からみて、とくに同範鏡の研究成果からすくなくとも 4 世紀初頭を下らないもので揖保川水系で最古の古墳とされているものである。古墳の立地がのちの因幡街道と揖保川下流域を一望のもとに眺める比高 180m のところに築造されていることは、古墳の選地が偶然のものでなく、大和政権の出雲・山陰地方への支配の中継的・拠点的性格を有した被葬者を想定することができる。ここに播磨風土記に記載されている天日槍と葦原志挙乎命の闘争説話を起想することができる。天日槍は「垂仁記」には新羅王子として帰化したという神で帰化氏族である但馬の三宅連の祖神とされている。葦原志挙乎命すなわち伊和大神は出雲の大神といわれる神であり播磨全域にひろく信仰されている神である。風土記ではこの二神の争い説話が揖保川流域を中心にして 6 ケ所でてくる。この説話はすべて先在した葦原志挙乎命に対し、後から侵入してきた天日槍の勢力との間で、国占めをめぐる争いが起きている。大和政権の地方進展の過程にかかわってこのような闘争説話がつくりだされることはごく普通のことであろうが、この説話は在地性を強くもち大和政権支配に対し抵抗を示した地方豪族の姿を伊和大神＝「伊和族」に体现して作為されたものだろう。吉島古墳築造の背景にはこのように文献にあらわれた伊和族が大和政権によって支配・隷属されていく姿をみることができよう。

養久山・三ツ塚古墳群についていえば、吉島古墳が築造された 4 世紀初頭ごろ、養久山 1 号墳は「農業共同体の首長」として大和政権との関係はさほど強い結びつきがない段階であったとみられる。同範鏡の研究によれば畿内勢力から地方の「首長」に対し二段階に分けて鏡が分与されたとみられている。吉島古墳は第一段階に、三ツ塚古墳は第二段階にそれぞれ鏡の分与がおこなわれた

ようであるから、養久山1号墳のつぎの三ツ塚古墳の被葬者の段階に養久山・三ツ塚古墳群は大和政権との関係が強められたと想定される。

### 3. 揖保川水系の前半期古墳

揖保川水系の前半期古墳は20基ちかくある。そのうち主要な古墳についてその概要を記しておく。

#### 吉島古墳（揖保郡新宮町吉島）

揖保川右岸の山頂ちかくの尾根上（比高 180m）につくられた全長36m、後円部径15m、前方部幅 6.5mの前方後円墳である。比高 180mという高所に立地し、この古墳から瀬戸内海の家島群島まで望むことができる。ハニワ、葺石はなく、明治30年に後円部にある長さ 5.3m、幅 1.2mの割石積みの竪穴式石室より鏡6面、小玉、刀剣、土器片などが発掘された。鏡は尚方作竜虎獣鏡1面、天王日月唐草文帯四神四獣鏡2面、吾作銘四神四獣鏡1面、波文帯竜虎鏡1面、長宣子孫内行花文鏡1面であって、すべて中国鏡である。これらの鏡には山城大塚山古墳、山城一本松塚古墳、大和佐味田宝塚古墳と同范関係をもつものがある。

#### 三ツ塚古墳（竜野市揖西町竜子）

養久山墳墓群のある山の続きにある山頂（比高90m）に立地する。全長45m、後円部径27m、前方部幅26mの前方後円墳である。昭和6年に後円部にある長さ4.7m、幅1.7mの割石積みの竪穴式石室から三角縁半肉刻神獣鏡1面、波文帯三神三獣鏡1面、鉄剣3口、鉄刀断片一括、鉄斧2個、鉄鏃2本が発掘された。波文帯三神三獣鏡は大分県亀甲古墳、和歌山県岩橋古墳と同范関係を持ち、鏡の研究からすれば吉島古墳よりやや時期の下るものである。なお、この前方後円墳から15mほど離れて径23mの円墳がある。ここからはキ鳳鏡1面、小形三角縁神獣鏡1面が発見されている。

#### 小丸山古墳（揖保郡御津町山王）

揖保川下流域の右岸にある独立丘陵上（比高30m）にある。径20mの円墳で、長さ 5.8m、幅 0.8mの、この地域では割石積みのやや長大な竪穴式石室

である。副葬品は銅鏃、鉄剣、鉄鎌が出土したと伝えられている。

#### 興塚古墳（揖保郡御津町黒崎）

瀬戸内海をみおろす景勝の地（比高60m）に立地し、全長 110m、後円部径 65m、前方部幅40mで墳丘全面葺石の揖保川水系最大の前方後円墳である。後円部に長さ6m、幅1m、深さ1.2mの割石積みの竪穴式石室があり、副葬品は銅鏡、玉類が出土したと伝えられているがさだかでない。古墳の立地は県下最大の古墳である五色塚古墳、赤穂市みかんのへた山古墳等に類似し、大和政権の海上交通に関係があるものとしてよく知られている。なお、興塚古墳の西の山塊には前方後方墳、方墳、円墳など23基が存在する後部山古墳群がある。

#### 松田山古墳（揖保郡太子町松田）

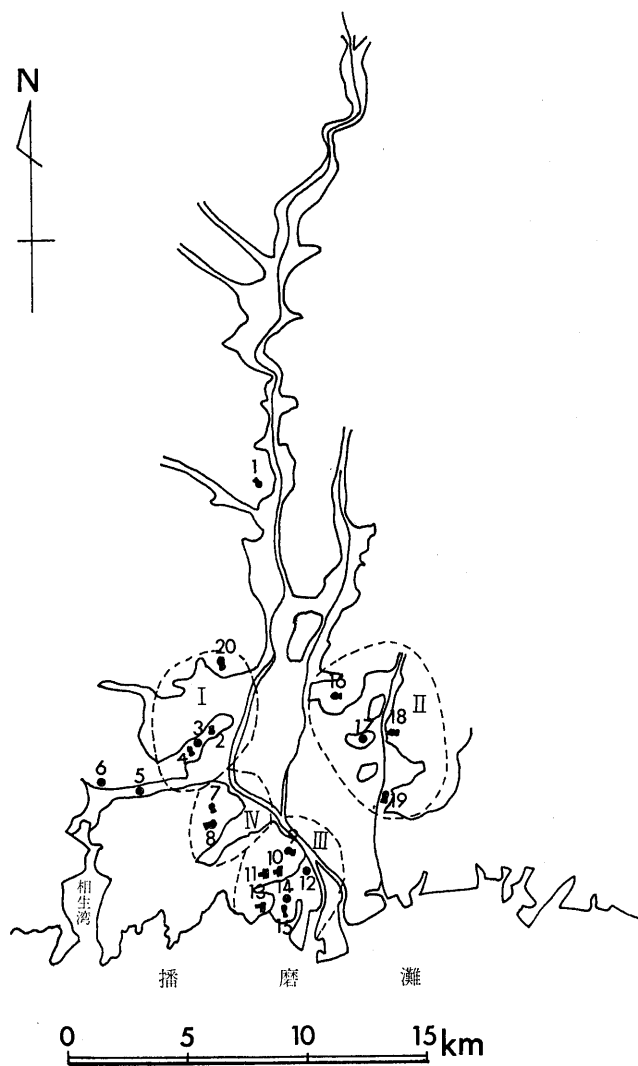
松田山山頂（比高50m）に立地し、径20mの円墳で葺石、ハニワはない。長さ4.5m、幅0.8mの竪穴式石室で副葬品に三角縁三神三獣鏡2面、筒形銅器、銅鏃、碧玉製紡錘車、勾玉、小玉、管玉がある。

#### ひさご塚古墳（姫路市勝原区丁）

松田山古墳の南方3kmのところであり、山丘を利用して築造されたとみられる全長109m、後円部径58m、前方部幅40mの前方後円墳である。葺石、ハニワは確認されている。周濠の形跡が墳丘西側の水田にみられるが、いまひとつ明らかでない。後円部には竪穴式石室の一部がのぞいている。従来前Ⅲ期古墳とみられていたが、やや時期が逆の可能性がある。

以上の概括的な説明をふまえ、中国鏡の研究成果からして吉島古墳は前Ⅰ期に想定できる。三ツ塚古墳は前Ⅱ期と考えられ、出土の同範鏡群（波文帯三神三獣鏡）が山城大塚山古墳、吉島古墳出土の鏡群よりやや新しく、類似鏡群に福岡県忠隈古墳、大分県亀甲古墳、兵庫県小見塚古墳、同御旅山3号墳、和歌山県岩橋古墳、兵庫県打出古墳、奈良県貝吹古墳、愛知県白山簀古墳等があげられ、それらの古墳の地域的なことも考慮に入ると大和政権と地方小国家の政治的関係に興味深いものがある。松田山古墳は立地、副葬品のセットから前Ⅱ期と考えるのが妥当であろう。ひさご塚古墳は墳丘築造からすれば古くなるかも知れないが、この水系の諸古墳の立地、またこの古墳の規模からして前Ⅲ

# 揖保川水系の古墳分布



I 養久山・三ツ塚古墳群  
II 丁古墳群

III 権現山・綾部山古墳群  
IV 河内古墳群

# 揖保川水系古墳概要一覧

	古墳名	立地	比高	全長	墳形	葺石	ハニワ	内 部 主 体	遺 物	備 考
1	吉 島	尾根	180m	36m		×	×	竪穴式石室 5.3×1.2m	鏡6面、土師器、ガラス玉18、刀剣	
2	養久山1号	尾根	70	30		列石	×	竪穴式石室1 箱式石棺5	鏡1面、鉄剣(鹿角付)、鉄鏃、ヤリガンナ、ガラス玉、	人 骨
3	三 ツ 塚	山頂	90	23		○	×	竪穴式石室	鏡2面(キ鳳、三角縁四獣)	
4	三 ツ 塚	山頂	90	45		○	×	竪穴式石室 4.7×1.7×0.7m	鏡2面(三神三獣々帯)鉄剣3、鉄刀1、鉄斧2、鉄鏃2、土師器	
5	塚 森	平地	0	44		○	×	竪穴式石室?		周濠巾14m
6	大 塚	尾根	20	35			○	竪穴式石室?		
7	宝 記 山	尾根	150	30			○?	竪穴式石室		
8	金剛山6号	尾根	30	28		○		竪穴式石室		
9	権現山18号	尾根	60	45						
10	権現山51号	山頂	140	50		列石	特 殊 ハニワ			
11	権現山50号	山頂	140	45						
12	小 丸 山	山頂	30	20		×	×	竪穴式石室 5.8×0.8m	銅鏃、鉄剣、鉄鏃	
13	綾部山14号	尾根	40	30		○				
14	荒 神 山	山頂	30				○	竪穴式石室?	二神二獣鏡、鉄剣、鉄槍	宝永年間 発 掘
15	奥 塚	山頂	60	110		○	○	竪穴式石室 6.0×1.0m	(伝)三角縁神獣鏡、玉、剣	
16	舎利田山	山頂	95	40				竪穴式石室		
17	松 田 山	山頂	50	20		×	×	竪穴式石室 4.5×0.8m	三角縁三神三獣鏡2、筒形銅器、銅鏃、紡錘車、勾玉、小玉、管玉	
18	城 山	尾根	80	40		列石?				
19	ひさご塚	平地	0	109		○	○	竪穴式石室		
20	西 宮 山	尾根	40	34		?	○	横穴式石室全長 6.6m	須恵器(器台、台付ツボ、台付子持装飾ツボ、提瓶、ハソウ、高坏、坏)土師器、鏡1、金製耳飾、冠帽、帯飾金具、玉類、馬具、鉄剣2、鉄鏃	

## 揖保川水系主要古墳の編年

年代 古墳群	300	350	400	450	500	550
	前 I	前 II	前 III	前 IV	後 I	後 II
	(吉島)					
I. 養久山・三ツ塚 古墳群	養久山 1 号	三ツ塚				
II. 丁古墳群	舎利山	松田山	ひさご塚			
III. 権現山・綾部山 古墳群	権現山 51 号	権現山 50 号	興塚	綾部山		
IV. 河内古墳群	金剛山 6 号	宝記山				

期と考えられる。興塚古墳は立地、規模からしてこの地域の代表的な前Ⅲ期に相違ない。またこれに続く前Ⅲ～前Ⅳ期のものに綾部山古墳群が考えられる。

つぎに、揖保川水系の古墳は山丘、小河川、平野等の自然条件および弥生後期の集落跡からみて、いくつかのまとまりがある。具体的にはⅠ、養久山・三ツ塚古墳群、Ⅱ、丁古墳群、Ⅲ、権現山・綾部山古墳群、Ⅳ、河内古墳群の４個が指摘される。このまとまりは本流から入りこむ小平野、谷間から流れる小河川などを共通に利用する生産単位的な一定の場をさし、弥生水稲耕作を基軸として形成、発展してきた農業共同体と深い関係を示しているとみられる。

こうした一定のまとまり内に首長系列とみられる一連の前半期古墳がある。４個の古墳群はそれであるが、それぞれの古墳群の生消は一様でない。

- Ⅰ 養久山・三ツ塚古墳群は養久山弥生墳墓群から、前Ⅰ期の養久山 1 号墳→前Ⅱ期の三ツ塚前方後円墳と続く。
- Ⅱ 丁古墳群は前Ⅱ期とみられる舎利山古墳→松田山古墳→前Ⅲ期のひさご塚古墳へと続く。

Ⅲ 権現山・綾部山古墳群は揖保川河口に位置し、前Ⅰ期の権現山51号墳→前Ⅱ期の権現山50号墳から、この水系最大の規模を誇る前Ⅲ期の興塚古墳と、さらには綾部山古墳群へと続く。

Ⅳ 河内古墳群は前Ⅰ期の金剛山6号墳、前Ⅱ期の宝記山古墳と続く。

編年表に示したように、前Ⅱ期で終結し、後に「首長」古墳が続かないものがある。前半期古墳を前Ⅰ期～前Ⅳ期に編年する場合の前Ⅱ期の規定の仕方に問題があり再検討しなければならない点があるとおもうが、ひとつの首長系譜としてとらえられる古墳群（まとまり）で、前Ⅱ期でその系譜が断絶する現象はひろく播磨全域においても指摘されるところであるが、とくに揖保川水系はその傾向が顕著である。そのことは前Ⅱ期で終結する多くの古墳群が政治的統合によって古墳を造営するだけの首長を輩出することができなくなった結果であろう。

一方、権現山・綾部山古墳群は前Ⅲ期の興塚古墳を盟主とし、前Ⅲ期の綾部山14、29号墳、それに前Ⅲ期末～前Ⅳ期の綾部山1～8号墳、11～13号墳があり同時期の古墳が多くあることは、興塚古墳の被葬者はこの水系全体（揖保川地方小国家）を統轄していた「首長」とみられ、綾部山古墳群の被葬者たちはその配下にあった幹部クラスのものとは比定される。

すなわち、揖保川水系の前半期古墳が示すように、養久山・三ツ塚古墳群、河内古墳群が前Ⅱ期で古墳の系列がぎれていることは、4世紀末ごろまでは、これらが相対的に自主性を保持できた面があったとみられる。そして5世紀に入ってから、揖保川水系全体を統括する強力な首長（興塚古墳）が出現する。各古墳群にあらわれた地域政治集団が水系全体の中に包含され揖保川地方小国家が形成されたとみられる。

## 参考文献

- 小林 行雄 『古墳の話』1959  
山尾 幸久 『魏志倭人伝』1972  
都出比呂志 「農業共同体と首長権」『講座日本史』Ⅰ1970

近藤 義郎 「古墳発生をめぐり諸問題」『日本の考古学』V 1966  
和田 萃 「墳の基礎的考察」(史林52-5) 1969

昭和47年度文部省科学研究助成金「播磨における前半期古墳の研究」の一部  
(本学非常勤講師、兵庫県教育委員会勤務)

### Summary

Tumuli of the First Half Term along the Ibo River.

Hisashi Korekawa

The Ibo river is located about 50km west from Kobe city and flows into the Inland Sea from Chugoku-mountainous district.

It's hasin exists some ancient Zenpō-Kōen-Fun which have important influence on coming into existence of the Yamato regime at 4 century. And they are Kongōzan No.6. Yakuyama No.1. Gongenyama No.51, and so on that are distinctive Zenpō-Kōen-Fun, are discussed on political relation between the Yamato regime and local small countries.